あるといいね、
草の根セーフティーネット

社会的排除による孤立化を防止するセーフティーネット作り事業

事業実施期間　2019 年 4 月～ 2020 年 3 月

NPO 法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク

あるといいね、
草の根セーフティーネット

【この事業の目的】

この事業は、自らの選択ではない社会的排除によって孤立した市民に対し、クラウド型地域見守り電話システムなどの IT 機器をツールとして活用して緩やかなつながりとコミュニティを生み出し、多様な世代と立場の地域住民による草の根セーフティーネットを築き上げることを目的としています。団塊世代が後期高齢者となる 2025 年とその先に続く多死社会を見据え、30 代・40 代を巻き込んで、IOT を地域住民が主体的に活用して互いに見守りあうことのできる地域社会の創生に取り組みます。そのために、地域住民が超高齢社会における地域コミュニティの在り方を模索し、政策提言の力をつけていくことを支援していく事業です。

今年度の実践的な取り組みから、以下のような具体的な成果を得ることを目標としました。

1．地域住民による草の根のセーフティーネットを社会的な仕組みとして政策提言していくためのプロセスを描きました。
2．セーフティーネットを支えていく見守りボランティアの役割を当事者と利用者の声から抽出しました。
3．クラウド型地域見守り電話システムを導入する見守りステーションが、地域性だけでなく、様々なテーマや人のつながりによるコミュニティの核となる可能性を事例から引き出しました。

目　次

1．2019 年度 WAM 事業で取り組んだこと　2
目標１ 地域からの政策提言のプロセスづくり　2
目標２ 見守りボランティアの役割　3
目標３ 新たなコミュニティの創生　5
2．草の根のセーフティーネットづくり　6
一人暮らし高齢者の自立を促す取り組み　8

1．2019年度WAM事業で取り組んだこと

目標１

地域住民による草の根のセーフティーネットを社会的な仕組みとして政策提言していくためのプロセスを描き、導入プロトタイプを構築する。

1 地域住民が政策提言していくための準備プロセス

地域住民が地域課題の解決に自ら主体となって活動に取り組み、実績が積まれ一定の段階に達すると、行政との関わりが大きなテーマになる。地域からのボトムアップで、草の根のセーフティーネットを社会的な仕組みとして政策提言していった活動のプロセスを検討した。特に、最も見えにくい準備段階のプロセスを、関わりあうステークホルダーに分けて、下図のように整理した。

例）見守りの仕組みを導入するための準備スキーム

地域住民が制作提言していくための準備プロセス

目的		地域	専門機関	行政
ステークホルダーの情報収集	情報収集	地域の活動団体の情報を収集。	地域医療や訪問介護に関心のある専門機関を調べる。	政策や担当部署などを調べる。
共感者の抽出と連携先の選定	活動開始	活動団体を訪問する	専門機関への紹介者を探す	自治体の担当部署を訪問する
		個別ヒアリング・訪問・説得		
広く周知していく活動とリーダーの育成	講座実施	講演会・シンポジウム・講座　開催		
	個別打ち合わせ	地域個別相談会/学習会　開催		
地域ごとの合意形成 広報サポート	稼働準備	地域ごとの合意形成 広報サポート	導入のオリエンテーション	担当部署への説明 協力支援関係の構築

2 自治体に仕組みの導入を試みた具体的事例（千葉県Ｎ市）

＜経緯＞

Ｎ市では地域包括支援センターを５か所増設したばかりで、高齢者支援の市民活動も活発なところから、導入可能性は高いと判断し、Ｎ市へアプローチした。

市内医療機関と地域包括支援センターにクラウド型地域見守り電話システム（以降、「あんしん電話」とよぶ）導入の可能性を専門職の立場からの意見収集を行い、その意見を踏まえて、地域包括支援センターを所管する部署との意見交換の場を持った。

＜担当部署の見解＞

現時点では、あんしん電話の導入は考えていないということだが、導入を検討しないポイントは３点あった。

１）施策との整合性が取れない。
孤独死予防策は、孤独死予防と災害の備えの施策である『Ｎ市地域支え合い活動推進条例』による自治会が主体となる「地域支えあい活動」が優先である。

２）システムの信頼性が弱い。
・開発された新たな仕組みは実績がない。
・行政のネットワークに入るためのセキュリティ対策が弱い。

３）難聴者に対するサポートの体制がない。
「手話言語の普及の促進に関する条例」を施行し、難聴者の地域活動の支援に取り組んでいることから、電話での安否確認事業は、この条例の流れに反する。

＜考察＞

以上から、政策に位置づけるためのハードルが明確になった。

１）については、既に取り組んでいる政策との住み分けの問題である。自治会の支え手がまだ、活躍できる元気な団塊世代であることを考慮すると、団塊世代が後期高齢者となる５年後の担い手については大きな不安がある。高齢社会の地域活動の担い手不足を補い、省力化とコミュニティづくりを実現できる有効な手立てであることが、現状では理解してもらえなかった。

２）、３）に関しては、「あんしん電話事業」を松戸市以外の自治体に提案し、取り組みが実現するためには乗り越えるべき課題である。特に、自治体への直接導入には、実績とより高い信頼性等が求められることが分かった。

目標２

セーフティーネットを支えていく見守りボランティアの役割を当事者と利用者の声を拾いながら、抽出する。

1 見守りボランティアの声

役員不足や高齢化に悩んでいた町会長の事例

要支援者を含めた独居高齢者の見守りを１人で受け持っていた。毎日訪問しても個々の家に行けるのは２カ月に１回ほどで、その間に「誰か倒れてしまっているのではないか」と心配で、時には夜も眠れなかった。あんしん電話を地域に導入したことで「何かあれば連絡が入る」と、気持ちが楽になった。

認知症の発症に気が付いた事例

これまで、押し間違いもなく元気で過ごしていたのに、頻繁に押し間違いをするようになったと見守りステーションの診療所から見守りボランティアサロンに連絡があった。ボランティアが訪問して様子を確認したら、あんしん電話がかかってくる曜日を認識できなくなっていた。地域包括支援センターに連絡して、見守りは介護事務所が主になった。

地域のつながりが自然にできた事例

高齢者は腰が曲がってかわいそうとか、単なる老人としか見ていなかったが、人それぞれに歴史があることに気づき、尊敬の念が出てきた。誰もが高齢になるということが自分のこととして考えられるようになった。一緒に訪問するボランティア同士のつながりもでき、挨拶を交わす人が増えた。高齢になってもこのままこの町で暮らすことができそうだ。

2 利用者の声

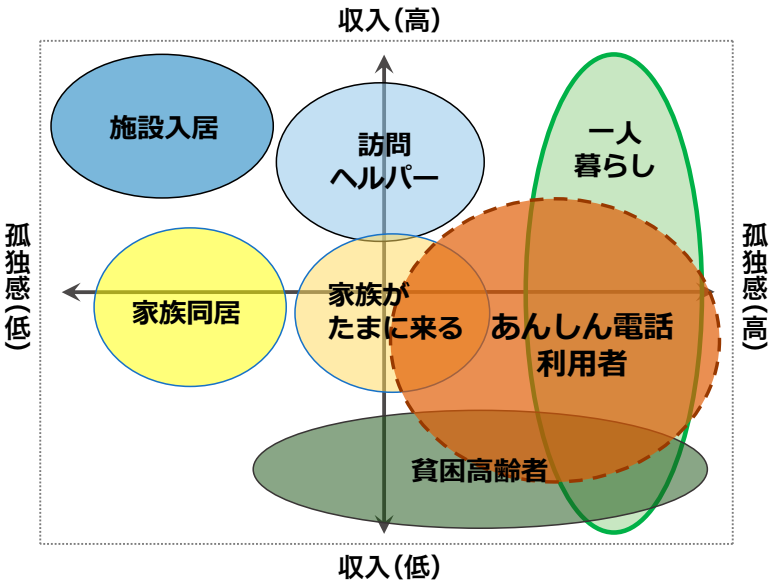
■足を骨折した一人暮らしの男性（70代）

エレベーターのない団地の４階に住んでいる。骨折したことに気が付かず、動けなくなってしまった。普段から人づきあいが苦手で、２日間、食事もとれず一人でいた。「あんしん電話」がかかってきたので「３」を押したら、１番しか押したことがなかったので、自治会役員とご近所見守りさんが訪問してくれ、大急ぎでみんなで降ろしてくれた。あの時誰も来てくれなかったら、大変なことになっていた。

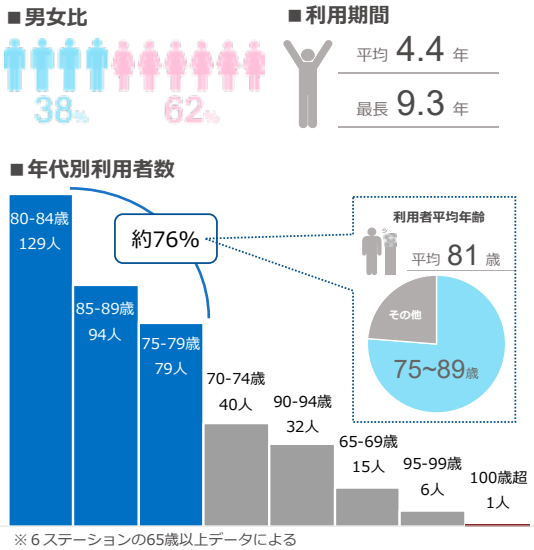
■一人暮らしの男性（73）

脳梗塞（こうそく）の後遺症とパーキンソン病のため体が不自由だ。市役所から、民間警備会社の緊急通報システムとあんしん電話の両方の利用を勧められた。あんしん電話には緊急通報システムとは違う意義を感じている。週１回の定期的な連絡を通じて見守り担当の自治会長と顔見知りになり、電球取り換えや換気扇交換を直接電話で頼んでいる。頼まれ事を請け負うことは自治会の仕事ではないし、システムでもないが、二人の「つながり」で生まれたものだ。（毎日新聞記事より）

■あんしん電話の利用者像



■あんしん電話の利用者データ



見守りと駆けつけの体制

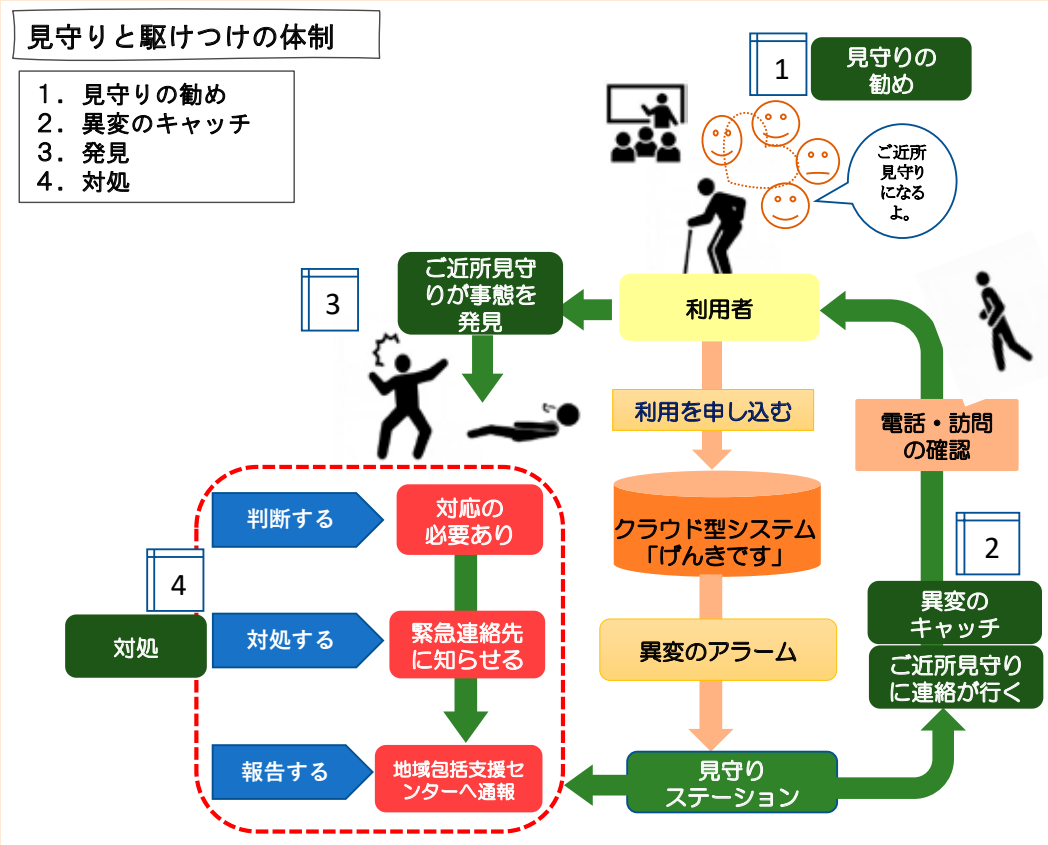
見守りと駆けつけの体制、その後の対処については、以下のように規定した。これにより、見守りボランティアの活動範囲と、事態を報告し対処を依頼する先を明確にした。

1「見守りの勧め」の段階では、高齢者と周辺への啓発活動を行い、関心を持ってもらう。

2「異変のキャッチ」は2日間連絡がつかない場合である。予め決めておいた「ご近所見守りさん」に訪問確認の依頼をする。

3「発見」の段階では、ご近所見守りが駆けつけ時、ルールに従って連絡先を判断する。

4「対処」の段階では、異変の事態を、見守りステーションと協力して緊急連絡先に連絡を入れ、地域包括支援センターに通報する。



目標３

あんしん電話を導入する見守りステーションが、地域性だけでなく、様々なテーマや人のつながりによるコミュニティの核となることを事例から読み取った。

1 新たなコミュニティを生み出すきっかけづくり

あんしん電話をつながりのツールとして活用すれば、新たなコミュニティを生み出すきっかけとなる。事例に挙がった「お寺」は、既に伝統的なコミュニティを持っている組織だ。信心によるコミュニティが力を失いつつある状況を危惧している僧職の方や、伝統的なお寺のコミュニティに新たな可能性を見出している研究者もいる。「無縁社会」といわれる現代に安心できる居場所を、地縁血縁とは違う形で提供、新たな共感によるつながりを持つコミュニティを創り出そうとしている事例である。

既にあるコミュニティ、伝統的な仕組みに残るコミュニティやニーズでつながる新しく生まれたコミュニティを守り育てることは、あんしん電話の拡大にもなる。地域コミュニティの再生には時間がかかる。既に出来上がっている、あるいは形成しつつあるコミュニティを「居住地」とは違う視点から育てていくことも重要である。

2 事例

■死後事務等を請け負う法人の事例（加入者数　80名。２０２０年度システム導入予定）

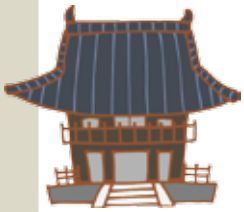
これまで家族が担ってきた役割を法人組織が担うことで、「安心して最期まで自分らしく生きる」ための人生設計を提案することを目的にしている。一人暮らしの高齢者を支える新しい「絆」の方策の一つとして、あんしん電話を導入した。サービスの内容は、「後見人制度だけではカバーしきれない連帯保証人の引受および身元引受のほか、日常生活の支援、資産の有効活用、死後の手続きなど、これまで家族にしか頼めなかったような役割も引き受ける」（ＨＰより）としている。

代表は、「安否確認というよりも、会員の皆さんとのコミュニケーションツールとしての役割のほうが大きいと感じている。電話に出なければ、こちらから様子を聞いたり、電話に出られなかった会員の方が、自分の状況を説明するために折り返しの電話をくれたりして、密な関係ができている。『あんしん電話』がなければ、こんな関係はできなかった思う。」と述べている。

■お寺の導入事例　（２０２０年度見守りステーション設置・システム導入予定）

独居や夫婦世帯が増え、引きこもりや若者の自殺の増加など、社会問題が山積している状況で、地域のランドマーク、信用と信頼の法人「お寺」が、係累のない方が集える会を設けて、心の「安心」の拠り所を作ろうとしている。「お墓を持たない」「お墓に入れない」というそれぞれの事情を持つ方のために、「同じお墓に入る仲間」として元気なうちから互いにつながり合うきっかけづくりにし、コミュニケーションツールとして、「あんしん電話」を利用する計画を立てた。

住職は、「『あんしん電話』の『見守りステーション』と、『ご近所見守りさん』と、『利用者』のトライアングルは、お寺と、住職や周辺のスタッフ、お一人暮らしの檀家さんやお寺に参る方の三者をつなぎ続ける仕組みに使えると思う。」と、語った

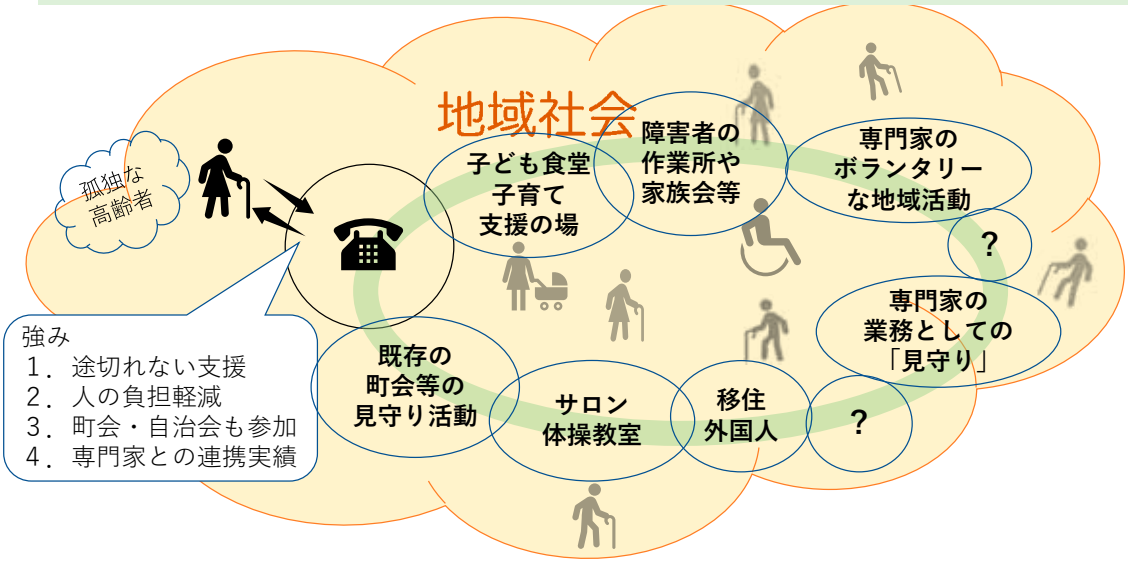


2．草の根のセーフティーネットづくり

あんしん地域見守りネット「地域連携チーム」活動報告

地域連携チーム代表 谷口起代（合同会社共創ラボ 代表）

様々な形で地域の見守り活動をしている人たちが連なり、交流し、
課題を出し合い、励まし合い、解決を模索していくプラットフォームへ。



見守りの形態には、サロンなどの場による見守りから、ご近所で緩やかに気にし合う関係性、定期訪問などたくさんある。これらに共通していることとして、ケアの視点を持って活動する者の所には、住民にしても専門家にしても、様々な情報が集まるということがある。それらが有機的に連なることが、自ら助けを求めることが難しい人をも支えられるセーフティネットの構築につながる。そこで「あんしん地域見守りネット」では、2019年度新たに「地域連携チーム」を発足し、地域で活動をする者が「見守り」をキーワードに連なるプラットフォームづくりを目指す活動に取り組んだ。

1 「地域連携チーム」づくりと「チーム力」の育成

チーム構成は、かねてから「あんしん地域見守りネット」に関わってきた、地域活動の経験のある介護専門職や福祉専門職、子育て支援 NPO の代表、自治会長、高齢者福祉施設職員の５名からなる。

第１回目の会議で、１年目は、年２回の「交流会」を開催し地域で活動する人たちが「見守り」をキーワードに連なる場を運営し、次年度以降の連携の方策を模索する年とすると決定した。その後月１回の会合を重ね、11 月に第１回目の交流会を開催した。３月に予定していた第２回交流会はコロナウイルス感染予防の観点から延期としたが、内部研修に切り替え、専門家と市民の協働によるケアリング・コミュニティ構築の事例と手法を学んだ。次年度には、研修で学んだことを題材にチーム力育成のブラッシュアップワークショップを予定している。このように、交流会の開催という共通ゴールの元、チーム内でそれぞれの活動領域や専門領域での経験を活かして意見を交わし合い、また研修で新たな学びを共にしてきたことを通して、次年度以降の活動のビジョンを明確にしてきた。また、この１年で持ち味を互いに活かし合い企画や方策を練るチーム力をつけることができた。

■地域連携チーム 2019 年度 活動のあゆみ

	日	内　容
第１回チーム会議	7/12(金)	地域連携チームの活動の方向性について
第２回チーム会議	8/20(火)	役割分担と交流会の内容決定
第３回チーム会議	9/24(木)	交流会の内容の検討 ゲストスピーカー決定
第４回チーム会議	10/24(木)	交流会の準備の段取りと当日の流れ
交流会の企画準備	11/26(火) 11/27(水)	交流会の準備、会員の出欠確認等
第１回交流会	11/29(木)	「地域包括支援センタースタッフを囲んで」
第５回チーム会議	12/17(火)	第１回交流会の振り返り 次回交流会の内容の検討
第６回チーム会議	1/21(火)	第２回交流会の企画 ゲストスピーカー決定
第７回チーム会議	2/21(金)	新型コロナウィルス流行を受けての対応の協議
チーム内研修	3/4(水)	「まつど暮らしの保健室」の事業展開から学ぶ 講師：まつど地域共生プロジェクト理事長　松村氏

コロナウイルス感染予防の観点からオンラインビデオ「ZOOM」を活用して実施した内部研修

2 座談会方式を取り入れた「交流会」の実施

〈交流会の２つのねらい　―課題認識の共有と語り合う関係の構築―〉

交流会では、ケアの視点を持って地域で活動する者が「見守り」をキーワードに横軸でつながり、必要な時に即座に連携できる間柄になれるような出会いの場となるために、まず共通の課題認識を持てる事、また語り合いやすい雰囲気になるように工夫した。共通の課題認識を持つために、地域連携チームの代表から、交流会を通して地域連携チームが目指していることについてプレゼンを行った。この場が「あんしん電話」による見守り活動を行っている者のみでなく、様々な形態で様々な人々を見守っている者が集い語らう場であることを明確にした。そして、ゲストスピーカーから現在の地域共生に向けた制度の動向、地域における課題、地域包括支援センターが直面している課題について話題提供を受けた。

語りやすい雰囲気を出すために、「座談会」方式を取り入れた。ゲストスピーカーで話した専門家も含んでお互いの顔がよく見える形で丸くなって座り、一人ひと言は発言する機会がある場の運営をした。

第１回交流会の様子

〈当日の様子と交流会の成果〉

当日は 30 名の参加者があり、その中には、新たな参加者として「子ども食堂」の運営者や、高齢者支援領域で独自に一般社団法人を立ち上げ活動している者がいた。「座談会」という新しい形式に、とまどいの声が一瞬挙がったこともあったが、気軽にゲストに質問ができ、普段以上にそれぞれの活動にかける思いが語られる時間となった。後日、「こんなに色々な活動が地域にはあることを知らなかった」「地域で連携していく主体が横軸で連なるということのイメージが見えた」といった感想が届いた。

「交流会」としたことの成果は、ケアの視点から様々な領域や手法で地域活動をすでに行っていた者同士が新たに出会い、これを機会に実際に課題を語り合う関係ができたことにある。次年度は、「交流会」活動を通して更に多くの近しい志を持つ者と連なり、地域課題に共に対応し共にアクションを起こしていける連携を生み出していくことが課題である。

一人暮らし高齢者の自立を促す取り組み

～シニア食堂～

1 シニア食堂について

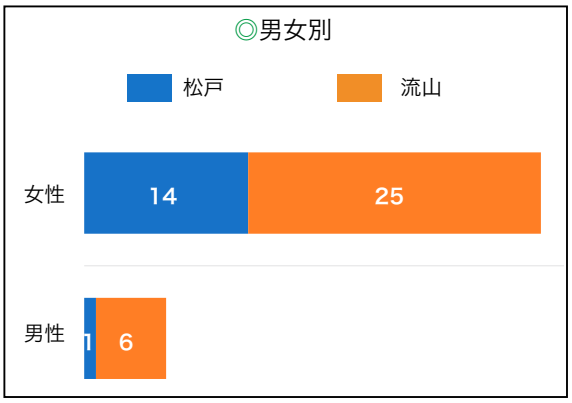
シニア食堂は 2017 年に流山市でスタートした独居高齢者を主対象とした料理交流会で、地域で孤立しがちな一人暮らしの孤独解消と食を中心としたＱＯＬの向上、支え合い、ネットワークと仕組みづくりの実現を目的としている。調理や食事を共にし、食後には笑いヨガや歌、ゲームなどを取り入れたプログラムで、心身の健康促進と仲間作りにつなげている。

流山では、開催３年の実績がある。継続している参加者から、リーダーとなるシニアボランティアを育成し、意欲と自発的な活動を引き出している。今回、シニアボランティアが延べ 29 名参加した。

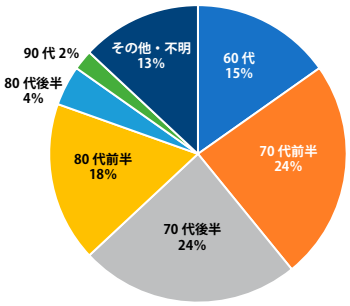
松戸市では、地域とのつながりの薄い新興住宅の課題とマンション群の居住者の高齢化が表面化しつつある地区での試みである。この地域で活動を定着させていくためには、主体的に活動する人材とチームの育成が課題である。

シニア食堂主宰　松澤花砂（NPO 法人東葛地区婚活支援ネットワーク 副代表）

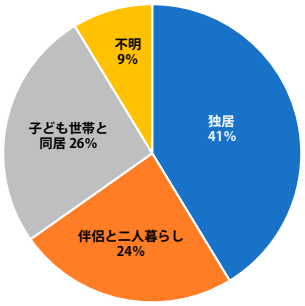
◎男女別



◎参加者年代別



◎世帯状況別



2 参加者の事例

①独居男性Aさん（79歳）の場合（流山市）

50代で離婚後一人暮らし。シニア食堂のスタート時から参加しているが、気難しくなかなか輪に入れずにいた。ＷＡＭ事業をきっかけに募集した新規シニアボランティアに手を上げ、レシピを試作してきて当日のサポートに活かしたり、スタッフとの連絡を楽しむなど積極的になった。友人も増え、「明るくなりました」と本人が語り、笑顔が常になるほどの変貌を見せた。

②独居女性Bさん（76歳）の場合（松戸市）

公共施設配架のチラシをきっかけに参加申し込みしてきた。シニア食堂体験会に生き生きと参加し、会話も楽しんでいた。１回目の修了後には「家にこもったりいつもの仲間といるだけでなく、新しいところに思い切って出てきたら、素晴らしい人や良い情報に出会えた」と喜びを語り、２回目には友人（独居男性）を誘って参加した。松戸市での継続開催を熱望している。

活動状況の写真

令和元年度
独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業　報告書

発行　NPO 法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク
代表理事　小山淳子
〒 271-0073 千葉県松戸市小根本 42-3　アセット松戸 II 401
TEL 047-712-2868　FAX　047-369-7445
MAIL　contact@npo-cocot.com
URL　http://npo-cocot.com/